

木村黙老の蔵書目録（三）

——宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「讚藩黙老木村氏蔵書目録」——

三 宅 宏 幸

一 木村黙老の蔵書目録について

近世後期に讚岐高松藩で家老をつとめた木村黙老は、曲亭馬琴や山崎美成、柳亭種彦などと交流をもった人物としてよく知られている。また、彼については、「一棟の倉は蔵書で詰り、地震の時、人々は戸外に飛出しても彼は一人書庫に黙坐して動かなかった」という話も伝えられており、多くの蔵書を有したであろうと推測されていた。

黙老関連の蔵書目録は現在二点知られている。一点が近時、論者が紹介した多和文庫蔵「高松家老臣木村巨所蔵書籍目録残欠」であり、もう一点が今回紹介する宮内庁書陵部図書寮文庫蔵の鍋田三善編『静幽堂叢書』全五十九冊の内五十五冊目「芸苑部二」所載「讚藩黙老木村氏蔵書目録」である。なお、この「芸苑部二」には、「讚藩黙老木村氏蔵書目録」（二十六～三十九丁）の他に、「芙蓉房座右図品目」（二～十五丁）、「五鱗翁神書目録」（十六～二十五丁）、「好問堂儲蔵書目」（四十～七十三丁）、「羅山文集鈔五十一編」（七十四～百二十一丁）などの目録が掲載される。

鍋田三善は、磐城平藩士で中老、江戸小石川大塚に住んでいた。安永七年生、安政五年三月十一日没。字は土行、通称、舎人。昌山・静幽堂、静堂と号した。読書家で、愛書家の旗本朽木綱泰の川々の会、屋代弘賢・山崎美成の参加した疑問会にも出席、東条琴台・小宮山楓軒・永山亥軒・西坂成庵らとも親しかったとされる。三善はこれらの文人と交

流し、その文化圏に黙老も含まれていたのであろう。

『讀藩黙老木村氏藏書目録』の存在は、黙老著『国字小説通』や『京撰戯作者考』が掲載される『続燕石十種 第一巻』（中央公論社、昭55・5）「後記」において、以下のように紹介されていた。

木村黙老は、名は巨、諱は通明、字伯亮。高松藩家老、四百五十石、天保九年歿、六十八歳。随筆『きくまゝの記』が、宮内庁書陵部に、藏書目録（『静山堂叢書』所収）がある。

厳密に言えば、右の説明には誤りもある。黙老の没年は天保九年一八三八でなく、安政三年十二月十日（一説、三日）であり、⁴藏書目録が所収されるのも『静幽堂叢書』である。その後、木村三四吾氏「解題」（『近世物之本江戸作者部類』、八木書店、昭63・5）が、本藏書目録を次のように評した。

宮内庁書陵部藏の同双書（『静幽堂叢書』—論者補）「芸苑部二二」に『讀藩黙老木村氏藏書目録』を輯録、右目録奥にいう、「天保六年乙未春、木村氏奉命徙居於高松。発期在近。因以借写焉 昌山記」と。巻初内題下の注記「天保辛卯」に従えば、これは天保二年同干支の著録で、出府以来江戸在番中に蒐めたものの略目録だった。

この木村氏の指摘を承け、神田正行氏「黙老旧藏本『塩尻』と馬琴」（『馬琴と書物—伝奇世界の底流—』、八木書店、平23・8）も、前述した黙老の藏書が倉一棟あった話を取り上げ、木村氏の「出府以来江戸在番中に蒐めたものの略目録」という推定に「従うべきであろう」と結論づけている。

二 「讀藩黙老木村氏藏書目録」の成立時期

論者も右の「略目録」という意見に異論はない。ただし、本目録に掲載される書目を概観したとき、「天保二年同干支の著録」という点については若干の違和を覚える。以下に、簡単に理由を述べたい。

本目録の特徴として、三十五丁表までは書目の冊数まで記すものの、三十五丁裏からはほぼ書名のみが記されている

という点が見られる。そして書名のみ、書目の中に、「拙著」と注がつく黙老著の随筆『龍集説考』（三十五丁裏）がある。この『龍集説考』については拙稿「曲亭馬琴と木村黙老の関係」（『日本文学研究ジャーナル』7、平30・9）で触れたことがあるが、序に「天保甲午歳仲秋上澣」、跋に「天保五稔甲午仲秋」とあることから、本書の成立は天保五年である。そして天保五年十一月二十日には、本書が馬琴に貸し出されたことが「馬琴日記」に見える。⁵⁾

一昼前、木村巨方使札。昨日此方方、使遣し候要書回報也。秘書稿并ニ金剛談等、返却之写本請取候よし、申来ル。且、木村氏著作竜説考一冊・古義太夫画入本、被貸之。

加えて、本目録には『白石叢書』の書名も載る（三十五丁裏）。これも前掲木村氏の指摘があるが、天保四年頃、黙老は馬琴から『白石叢書』を借りて写本を作成していた。「馬琴日記」天保四年十月十四日の項に、

一、四時比、木村黙老方使札。白石叢書八之巻、被返之。尚又、十之巻貸進の事申来ル。并ニ、そゞる物語も被返之。且、近来浮世画工之事被問、白石十の巻かし遣ス。

とあり、黙老が馬琴から次々と『白石叢書』を借りる様を確認できる。木村氏は黙老の白石熱について、

学問的な香気もあり、考証の利いた歴史読み物として、当時やや高級の本読み仲間では随分の白石ばかりで、実はこの双書自体もそんな気運のうちに集成されたものなのだろうが、黙老も後れ馳せながらそうした連中に加わりうとしていたものとみえる。

と指摘している。『本朝軍器考』や『藩翰譜』、『白石遺考』など白石の著書は目録の三十五丁以前にも掲載されるが、馬琴と交流する中で黙老の『白石叢書』への興味がさらに湧いたと思われる。

これらのように、「馬琴日記」などから確認できる黙老と馬琴との交流を見てみると、天保四年から五年という期間に両者で貸借が行われた書目の名が、今回取り上げる蔵書目録に見受けられるのである。とすれば、本目録は黙老が天保二年頃に「改正」し、その後、江戸在番の天保六年までに蒐集した書物もその都度書き加えていき、黙老が江戸を離れる前の最新版を天保六年春に鍋田三善が謄写した、と考えられるのではなからうか。

黙老と馬琴とが書籍の貸借を続ける折から、黙老は国家老を命ぜられ、馬琴に帰藩する旨を天保五年十二月五日に伝えていた。これも前掲の拙稿で述べたことであるが、ちょうどその時期に馬琴は黙老から三善編の『静幽堂叢書』を借りていたようで、同日の「馬琴日記」に次のように記している。

一四時過、木村黙老を使札。過日、貸進の垣下徒然草、金平千人切、被返之。且、静幽堂叢書の内、六冊かり出し候よし、被返之。今般、黙老国勝手勤申付、右之在府の賞功として、主君を金百両拝領のよし。依之、来春二月比出立にて、高松へ引移り候よし、申来ル。

黙老が『静幽堂叢書』を「六冊かり出し」とあるので、「被返之」は「被貸之」の誤りであろうか。黙老から『静幽堂叢書』を借りた馬琴は写しを作成し、その馬琴旧蔵『静幽堂叢書』二冊が国立国会図書館に所蔵されている（請求記号・わ〇八一―一二）。下巻末尾には、馬琴の手による以下の識語がある。

この書を集録したる静幽堂は安藤対馬守殿家臣にて、通称を鍋田舎人といふとぞ。古記録にくはしきよしにて、近曾水府宰相の君の書籍の御用を命ぜられしかば、折々小石川の御邸へまゐるといふ。吾友木村黙老人、相識也と聞えしかば、老人に就てこの書を見ることを得たり。尚数巻あるよしなれども、黙老瓜期にて、この春高松へかへりしかば、借贖によしなくてやみにき。

天保六乙未年春月之吉

著作堂老翁

鍋田三善と黙老とが「相識」であり、そのため馬琴は黙老を通じて『静幽堂叢書』を借り受けることができたものの、黙老が高松に帰藩することになり、残りの謄写は叶わなかったという。

右の馬琴の識語を見て気づくのは、「讃藩黙老木村氏蔵書目録」に記される三善の識語「天保六年乙未春、木村氏奉命徙居於高松。発期在近。因以借写焉」とで、時期も内容も共通していることである。ともに、黙老が天保六年春に高松へ帰る旨を記している。想像を逞しくすれば、黙老と三善とが「相識」であったことから、黙老は馬琴のために『静幽堂叢書』を借り出して馬琴に貸した。しかし高松へと帰ることになった黙老が馬琴から返却された『静幽堂叢書』を

三善に返す折に、黙老の蔵書目録を三善が借りて『静幽堂叢書』に写しとったのではないだろうか。あるいは、『静幽堂叢書』を貸した返礼として、黙老から蔵書目録を三善に貸し出したのかもしれない。いずれにせよ、様々な文人の交流のおかげで黙老の蔵書内容が現在に至るまで遺つたと考えると興味深い。

三 今後の課題

最後に、本蔵書目録について課題を述べておく。本目録の掲載書目数はもう一つの蔵書目録である多和文庫蔵『高松家老臣木村巨所蔵書籍目録残欠』に比して少ない。しかし、本蔵書目録に掲載される「懸幅」「絵図類」「書画類」は多和文庫蔵蔵書目録にはなく、黙老の蒐集した画類を教えてくれる点で貴重である。黙老は画業もよく行っており、平賀源内の肖像を描いたことでも有名である。加えて、三十七丁裏に記される「石顔孔雀画」、「蝦夷人肖像」と思しき黙老画の懸幅が、香川県立ミュージアムに所蔵される。これらの資料についても今後検証し、黙老の文業と画業とを明らかにしていきたい。

注

- (1) 木畑貞清氏『木村黙老と滝沢馬琴』（香川県教育図書、昭10・3）。
- (2) 多和文庫蔵「高松家老臣木村巨所蔵書籍目録残欠」（函号・四十二）。「三宅宏幸」「木村黙老の蔵書目録（一）」多和文庫蔵『高松家老臣木村巨所蔵書籍目録残欠』（上）——『説林』66、平30・3）、三宅宏幸「木村黙老の蔵書目録（二）」多和文庫蔵『高松家老臣木村巨所蔵書籍目録残欠』（下）——『説林』67、平31・3）。
- (3) 『国書人名辞典 第三卷』「鍋田三善」（山岩波書店、平8・11）を参照した。
- (4) 『国書人名辞典 第二卷』「木村黙老」（岩波書店、平7・5）では没年を「十二月三日」とする。なお、香川県高松市峰山墓地に遺る黙老の墓に服部稷治氏にご案内頂き、墓碑に記される没年が安政三年十二月十日であることを確認した。

(5) 柴田光彦氏編『曲亭馬琴日記』（中央公論新社、平21）に拠った。以下、「馬琴日記」の引用は同様である。

(6) 前掲木村氏論考が、「馬琴日記」中の「被借之」について、「被貸之」とあるべきを、これは馬琴の筆癖か、日記中にまま散見する。」と述べている。あるいはこれも似たような癖か。

【附記】資料の翻刻を許可して下さった宮内庁書陵部図書寮文庫に、黙老の墓の所在地についてご教示頂いた服部穰治氏に、心より御礼申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費（若手研究「木村黙老の文事に関する基礎的研究」、研究番号：18K2292）の助成を受けた成果の一部です。

四 翻刻「讚藩黙老木村氏蔵書目録」

〔書名〕 讚藩黙老木村氏蔵書目録（『静幽堂叢書』第五十五冊「芸苑部二」所収）

〔所蔵〕 宮内庁書陵部図書寮文庫

〔函号〕 一〇三・一〇

〔冊数〕 一冊。

〔書型〕 半紙本。縦二十三・六×横十六・三糎。

〔体裁〕 写本。四ツ目綴じ。

〔丁数〕 墨付十四丁（全百二十一丁中、二十六丁～三十九丁）。

〔年記〕 天保二年（天保辛卯改正）、天保六年（天保六年乙未春木村氏奉命徙居於高松発期在近因以借写焉）。

〔備考〕 書籍・三百五十六点、懸幅・四十五点、絵図類・四十五点、書画類・七点。

【凡例】

- ・ 仮名遣いは原本に準じ、漢字は旧字体を新字体に改めた。
- ・ 割書されている箇所は「／」で表した。
- ・ 原本に丁付はないが、末尾に（26才）（26ウ）のように筆者が私に付した。
- ・ 原本の書名の並びは上から下に、下から左上に、の順であるが、翻刻では左へ順に記した。

【翻刻】

讚瀋黙老木村氏蔵書目錄天保辛卯改正

七十三冊

一 同 弁疑	一	一	一
一 西洋雜記	一	一	一
一 蝦夷草紙	三	一	一
一 海底錄	一	一	一
一 羈旅漫錄	一	一	一
一 和漢奇文	三	一	一
一 四王合伝	六	一	一
一 曳尾庵筆記	十三	一	一
一 祖谷紀行	一	一	一
一 清俗紀聞	一	一	一
一 本草図譜	一	一	一
一 貞丈雜記	一	一	一
一 御系図	一	一	一
一 本朝軍器考	二	一	一
一 介錯古法	二	一	一
一 武器考証	一	一	一
一 職原抄支流	一	一	一
一 催馬楽	二	一	一
一 要篋弁志	二	一	一
一 御即位式	一	一	一
一 白河侯被仰渡	一	一	一
一 国本論	一	一	一
一 求言録	一	一	一
一 通祭小記	一	一	一
一 官中秘策	一	一	一
一 明律国字解	六	一	一
一 備忘抄	三	一	一
一 有識問答	一	一	一
一 同 註	一	一	一
一 服飾彩図	三	一	一
一 桃花薬葉	一	一	一
一 大日本史	七十三冊	一	一

一 (26才)

一 軍器考標疑	一	一 宗賢宗仁聞書	一
一 騎射秘抄	一	一 馬書下馬札	一
一 馭馬故実	一	一 八の記	一
一 鷹書「秘伝書／聞書」	合本	一 雑兵物語	一
一 條々聞書	二	一 馬見參入記	一
一 軍器考補正	一	一 美人草射儀	一
一 將軍御元服記	一	一 射家妄説集	一
一 似匠誤号	一	一 隨兵次第	一
一 甲冑名考	一	一 首実檢法式「軍法抄／武具要説」	合冊
一 大正流軍馬卷	一	一 「出陣聞書／射御拾遺抄」	合本
一 愚得隨筆	二	一 鎧直垂「弓袋臺目袋／貞昌聞書」	合冊
一 酌并記	二	一 「軍札抄／兵具雜記」	合本
一 馬鞍鐙	一	一 鷹書「秘伝書／鷹狩記」	合本
一 大的式	一	一 結記	一
一 馭馬故実 <small>異本</small>	一	一 犬追物式序例	一
一 諸鞍日記	一	一 犬追物再興土台	一
一 書札雜々聞書	一	一 同 図説	一

一古今銘尽大全	五	一生駒覚書	一
一荷積覚書	一	一鬪争秘記	三
一忠臣実語	二	一五事略	六
		一義人録	二
		一の刑録	一
一古刀銘尽	九	一東照宮御文	一
一武侯心書	一		
一鮫皮精義	二		
一踏水訣	一		
一武教三等録	三	一「米沢家騒動／青山侯御預」	合冊
一海国兵談	一	一藩翰譜	五
一平嶋記	一	一台湾鄭氏紀事	三
一華陽皮相	三	一大清三朝実録提要	八
一鈐録外書	一	一唐土名勝図会	六
一孫子兵法扱	三	一海外奇談	三
一和蘭通舶	二	一HALMΛ	廿七
一神器説	二	一檢籠韻府	三
一拾万石出陣積	二	一和蘭助字考	一
一後世禁	三	一ドーフハルマ	
		一扶桑雑事録	全部

「(29才)

「(29ウ)

目次

新野問答	一	芳野日記	一
くさくさの間に答	一	神武紀八首和歌抄	一
春湊浪話	三	国家八論	一
楳村載筆	一	同 斥非	一
退私録	三	歌体約言	一
新安手簡	三	筆のさか	一
白石手簡	二	雅俗弁	一
鳩巢議神道書	一		
遊和草	一	続雅俗弁	一 (30才)
続遊和草	一	東さとし	四部合冊
故実秘要抄	一	源氏竟宴集	一
古器考	一	新題百首	一
玉章同心結方勝考		催馬楽譜	
文庫文机硯箱図		風俗譜	
貞徳翁自歌合		東遊歌図	
元文大嘗会和歌		東遊并悼歌	
文政大嘗会記		鷹文字	
	四部合冊		四部合冊
一	一		一

当道式目	一	烏有論	
当道要集		江府紀行	五部合冊
同 重要録	二部合冊	名流品題議	
茶湯独話		靈龜甲之図 <small>并</small> 占辭	
附録問答	二部合冊	和氣清麿絵詞	三部合冊
赤穂忠臣説		雪舟伝	
同 三宅尚齋筆記	合冊	探幽齋碑誌 <small>并</small> 銘	
赤根屋半七心中書置写	一	文政年号改文	
七月の記	一	浮鯛抄	四部合冊
天明炎上記		はなし覚	一
又記	合冊	通計四十五本 冊数四十三卷	
国性爺唐訳		一蘭畹摘芳	三
砂金袋形附記		一六物新志	三
延事速事		一蘭葉鏡原	三
和蘭新改集	四部合冊	一蘭学医事集成	三
宗論 <small>并</small> 禅宗		一火浣布略説	一
公家配宮次第		一医範提綱	三
三愛記		一新製地球図説	一

一 紅毛雜話		五	一 三国通覽		一
			一 坤輿図説		一
	「(30ウ)		一 申若音曲記		一
一 紅毛雜話		五	一 「箴矢擲／百將取合」異本	合冊	一
一 華夷通商考		五			
一 沿海異聞		一			
一 魯西亜志		一		「(31才)	
一 解体新書		五	一 北征秘談		四
一 悉曇字義聞書		六	一 生嶋十吉漂流記		一
一 遠西奇器図説		五	一 同 異録		一
一 地球全図略		五	一 漂泊奇談		一
一 増訳采覧異言		五	一 坎々奇話		七
一 万国地理図		十三	一 外国雜志		一
一 万国地理図		一	一 中山伝信録		六
一 大清三朝事略		一	一 北槎聞略		
一 建州女直始末		一	一 北海隨筆		一
一 武具短歌		二	一 異船燒撃記		一
一 西域聞見録		三	一 八丈嶋筆記		一
一 擔暴雜記		三	一 魯西亜異聞		五
一 和蘭医方名物考		十五	一 吉五郎漂流記		一

一 翻訳水質論	一	一 和蘭語法解	三
一 和蘭度量考	一	一 遊名山記	二
一 和蘭騎養階梯	一	一 仏国曆象編五	壹帙
一 「求力法論／菩多尼伽經」	合冊	一 征韓偉略	四
一 西説觀象經	一	一 瑠璃宝鑑	一
一 星凶歩天歌	一	一 穆公遺事	一
一 乾坤奇觀	一	一 続王代一覽	四
一 蛮旗図	一	一 好逑伝四	壹帙
一 訳鍵序	一	一 和蘭雜劇書	一
一 エンゲルウワールド	一	一 安斎筆記	三
一 紅毛語訳	一	一 座右書	一
一 屬文錦囊	一	一 得泰船筆語	一
一 鎖国論	一	一 甲組類函	二
	「(32ウ)	一 勝之助漂流記	一
一 蘭学階梯	二	一 西洋七金訳説	一
一 蝦夷奇観	一	一 暹羅話「山田仁／右ヱ門」	一
一 人參攷	一		
一 蘭訳弁髦	二	一 和蘭言辞書	「(33オ)
			一

一 バスタルド

一 安齋叢書

一 伊勢系譜略

二 考説

姓氏弁

同 附説

押字考

三 本朝軍器考標疑

四 同 追加

同 余評

諸家紋

五 鎧具足弁

古鎧色目

鎧直垂色目

甲冑名考

品革威考

勢語臆断別勘

六 鎧色談

卅

同 附録

七 源家八領鎧考

八 保侶衣推考

九 同 追加

同 邪説

梅檀鳩尾問答

櫛鞆屨背問答

馬上三物絵評論

十 烏帽子考

十一 烏帽子考

平札考

烏帽子折問答

狩衣考

引倍支板引之事

赤鳥之事

三 禁色考

乗物考

乗物考

- 菅像弁
渡唐天神像之弁
紫芝園漫筆卷四
訶純
同 附言
十三春日神殿飾馬
伊勢齋宮記
加茂齋宮記
十四春日神殿飾馬図
十五軍神問答
神道独語
十六殘儀兵の弁
鳴弦臺目考
笠掛引目考
蝦夷鋏先考
弁慶七道具考
三儀一統之弁
同 追考
- 七矢羽文考
宇津保之事
軼考
同 附録
六法量物歩立聞書
九射家妄説集
二十烟草集説
鷹鳥々柴附ル事
伊勢因州旧記
狂筆
廿一東鑑不審問答
田楽考
廿二扶桑見聞私記弁偽
廿三南嶺子評
秋齋問語評
南嶺遺稿評
廿四高忠軍陣聞書

一 「医範提綱内／象銅版図」 壹帖 [箱／入]

一 独考

一 近世畸人伝

一 独考論

一 続近世畸人伝

一 松蔭日記

一 御旗本武鑑

一 白石叢書

一 日光地誌

一 しほしり

一 東遊漫筆

一 続安斎叢書

一 徳廟御行実

一 板倉博道随筆

一 東雅

一 龍集説考 拙著

一 瀬田問答

一 続鱈譜

一 「幼学問答／告志篇」

一 遺老物語

一 軍器考翼

一 明君秘録

一 阿多布久路 [標／注]

一 鞍鐙新書

一 「武備根元／政要録」

一 衆禽写真図

一 以貴小伝

一 衆鱗写真図

一 手綱図式

一 本草図譜 湿草部

一 魯西亞人來舶記

一 一話一言

七拾冊

一 积氏要覧

一 街談録抄

一 翻訳名義集

一 (35ウ)

合冊

合冊

一 外蕃通書

一 江戸繁昌記

一 論孟考文

一 旧記類聚拔萃

一 道三翁養生物語

三篇

一 随観写真

一 閑散余録標注

┌ (36才)

懸幅

一 源義公御消息

一 秀吉公行列書

一 東涯讚大石良雄画

一 石州之文

一 蕪村山水

一 明周遠画花鳥

一 林单山老梅喜鵲図

一 陳良楚山水

一 陳無名著色花鳥

一 柳淇園竹籃插花

一 錢禹方山水

一 杜君沢

一 伊孚九山水

三幅対

└ (36ウ)

一 圃史唐本写

一 泰西本草名疏

一 桜梅日記

一 翁嫗夜話「一名讚／州府志」

一 火攻知要

一 平安鬱攸記

一 月波日記

一 犬追物集覽

一 植学啓原

一 薩州志

一 とわすかたり「東海平／維章述」

一 大和記

一 朱舜水書

一 孽海慈航画卷袈法師

一 周叔僖美人図

一 駱駝写真

一 高陽菜花

一 修学院離宮図

一 南畝肖像蕉鹿画

一 南蘋模画花鳥

一 応挙画狗

一 水滸豪傑図「陸讓画／摹本」

「(37才)

一 平賀鳩溪書火浣布説

「二／卷」

一 石顛孔雀画

一 竹石東溪画譜

一卷

一 栗山筇斎合作蘭

一 奥州後三年合戦図

「三／卷」

一 山村座芝居図

「(37ウ)」

一 蝦夷人肖像

一 平治合戦画卷

一 奥村政信遊宴図

一 蒙古襲来画卷

二

一 東讚十六勝景「竹石／画」

一 刀剣図

二卷

一 閑窓適意「竹石／画」

一 三嶋神宝図

一卷

一 水滸伝百八豪士図「明陳章／侯模画」

一 明陳賢美人画幅

一 建涼岱四体画帖

一 西廂記画帖「文徵明書／仇英画」

一冊

一 明画春画帖

文徵明雪中山水図

一 新白石書唐詩

一卷

一 仙槎奇遊「女人／岐」

画卷

絵図類

- 一 魯西亜佩刀摺本
- 一 同 曲尺図
- 一 同 槍尖図
- 一 同 摺本
- 一 同 烏銃図
- 一 同 銃槍摺本

- 一 同 烏銃写真図
- 一 同 佩刀図
- 一 蝦夷矢筒図
- 一 水虎写真図
- 一 魯西亜寒熱升降水図
- 一 大陽真図
- 一 月体真図
- 一 蝦夷松前魯西亜形成図
- 一 箱館境内図
- 一 蝦夷全図
- 一 仝 周廻嶋嶼図

一 (38才)

- 一 箱館客舎図
- 一 蝦夷里程図
- 一 唐太東郡図
- 一 蝦夷群島接壤図
- 一 浪華浮瀬酒盃図
- 一 銅版地球全図
- 一 御備組図
- 一 佩文耕織図
- 一 地転儀

- 一 朝鮮国地理八道図
- 一 三国通覧図
- 一 平天儀
- 一 吹上御庭韓人曲馬図
- 一 人面瘡
- 一 御城内御殿間取図
- 一 浪華八方早見図
- 一 地球万国山海輿地全図

一 (38ウ)

九枚

一大日本輿地全図

一伊勢貞丈肖像

一大清広輿図

一同 貞春像

一五畿七道細図

二冊

一陳元贇書

一枚

一山城国細図

一唐土沿革図

一楠軍旅図

天保六年乙未春木村氏奉命徙居於高松発期
在近因以借写焉 晶山記

一大日本形勢平面図

一（39ウ）

一諸国名勝図

一包

一司天台銅版細密地球全図

一台湾争戦図「銅版／写」

一

一集古図

廿五卷

一（39才）

書画類

一小栗宗丹伯夷図

「二／枚」

一和蘭馬具図

一冊

一「大和／河内」古碑石刻

一卷

一林羅山書

一葉